

# 第21回スタディツアー 報告書

2008年

特定非営利活動法人  
ヒマラヤ保全協会

## 目次

1. はじめに .....	4
2. 調査項目 -問題提起- .....	5
(1) ネパール人は日本人をどうおもっているか .....	5
(2) エベレストが見たい .....	5
(3) 村人の生活はどのようなものか .....	5
(4) 環境保全と村の未来はどうかかわっているか .....	5
(5) ヒマラヤ保全協会のプロジェクトを見る .....	5
(6) 村の医療体制はどうか .....	6
(7) 村人と交流したい .....	6
3. フィールドワークの記録 -データベース- .....	7
(1) 森林保全 .....	7
木の伐採の止まらない一つの要因。(Sa-10).....	7
森林保全と開発の隣合わせに。(O-9).....	7
サリジャ村の植樹種は、ナンギ村に比べ少ない。(Si-3).....	7
サリジャ村の森林保全。(O-3).....	7
サリジャ村近くのお店のおじさんの話。(O-4).....	7
(2) 生活環境の変化と開発 .....	8
6ヶ月間での村の変化。(I-5).....	8
村人は何を欲しているのか。(O-5).....	8
(3) 村人の実態 .....	8
サリジャ村最後の夜。(O-6).....	8
指導熱心な母親。(I-4).....	9
16歳の女の子の1日の生活。(Sa-6).....	9
サリジャ村の出発の朝。(O-7).....	9
自然の中での生活。(Sa-5).....	9
(4) 村民世帯の現状 .....	9
ホームステイ・ファミリー。(O-1).....	9
ホストファミリーの事情。(Sa-1).....	10
家族の分散居住が進展しており、男子及び若手労働力が減少している。(Si-2).....	10
一家の大黒柱は、日本での労働を望んでいた。(I-2).....	10
ホストファミリーの子どもたちは、海外で就労。(I-3).....	11
(5) 現金収入向上の必要性和取り組みの現状 .....	11
織物の質の向上。(I-6).....	11
ナンギ村の新製品は、他の村の製品に比べほぼ遜色はないが、サリジャ村の織物製品は改善の	

余地がある。(Si-5).....	11
ナンギ村にて(養殖場)。(O-8).....	11
ホストファミリーは、現金依存度が高い。(Si-1).....	11
<b>(6) 教育</b> .....	<b>12</b>
サリジャ村の Primary school の実態。(O-2).....	12
<b>(7) 医療保健・衛生</b> .....	<b>12</b>
村での保健体制(ヘルス・ポスト)。(Sa-7).....	12
サリジャ村の衛生状態。(Sa-2).....	12
サリジャ村のトイレ事情。(Sa-8).....	12
虫に対する意識。(Sa-4).....	13
サリジャ村の炊事環境は劣悪。(Si-4).....	13
食事の偏り。(Sa-3).....	13
<b>(8) 外部者としての配慮</b> .....	<b>13</b>
日本のお土産を渡す際に注意すべきこと。(I-1).....	13
<b>4. 参加者の感想</b> .....	<b>14</b>
村の発展 .....	14
ネパールの山村が意味するもの .....	15
チャウチャウ .....	17
外部者の視点 .....	18
<b>5. 写真</b> .....	<b>20</b>

# 1.はじめに



2008年8月27日から9月7日にかけて、ヒマラヤ保全協会・第21回スタディツアー（ネパール・ヒマラヤ・フィールドワークの旅）を実施した。今回は、前回（20回）と同様にパルバット郡サリジャ村とミャグディ郡ナンギ村を訪問し、プログラムも前回とほぼ同様であった。

テーマは「森林保全と参加型村落開発」であり、「百聞は一見にしかず、国際協力のフィールドへ！」をキャッチフレーズに、ヒマラヤ保全協会のネパール事業地を訪問し、国際協力の現場を見学、

植林などの現地活動に参加した。今回も特に、「フィールドワーク」に焦点をあて、異なる自然・文化・社会の中につかり、日本からでは見えにくい現地の様子を、自分の目で確かめ、心で感じ、様々なことを考える貴重な時間をつくりだした。

スタディツアーのポイントは以下の通りであった。

(1) 国際協力の現場を「フィールドワーク」！

ヒマラヤ保全協会の活動現場をフィールドワークする。この「出会い」と「発見」を通して、自らを成長させる。フィールドワークとデータカードの実習もする。

(2) 植林ボランティアとして、村人とともに汗を流す、感動！

ヒマラヤ保全協会がすすめている植林などの現地活動にボランティアとして参加、村人と交流し、ともに汗を流し、森林保全や村づくりに貢献する。

(3) ネパール山村の民家にホームステイ、24時間生活丸ごと体験！

現地の家庭でのホームステイで、村人の普段の生活にふれ、異文化を体験する。ホームステイを通して、その国の本当の姿を見る。

日程とプログラムは次のとおりであった。

日付	曜日	場所	プログラム	食事	宿泊先
8月27日	水	Narita-Bangkok	移動(フライト) → バンコク(自由行動)	機	ホテル
8月28日	木	Bangkok-Kathmandu	移動(フライト) → 自由行動(カトマンドゥ観光) → ミーティング(ヒマラヤの自然環境概説)	○ 機	ホテル
8月29日	金	Kathmandu-Pokhara	移動(バス) → ミーティング(ヒマラヤ保全協会のプロジェクト解説)	○	ゲストハウス
8月30日	土	Pokhara-Sajja	移動(タクシー) → ヒマラヤトレッキング → 村での歓迎会 → ホストファミリーの家へ	○ ○	ホームステイ
8月31日	日	Sajja	学校訪問、森林保全プロジェクト・苗畑見学、植樹	○ ○ ○	ホームステイ
9月1日	月	Sajja	村落開発プロジェクト見学 → 村人とのミーティング・交流	○ ○ ○	ホームステイ
9月2日	火	Sajja-Nangi	ヒマラヤトレッキング → 森林保全・村落開発プロジェクト見学	○ ○ ○	ロッジorホームステイ
9月3日	水	Nangi-Pokhara	ヒマラヤトレッキング → 移動(タクシー)	○ ○	ゲストハウス
9月4日	木	Pokhara	ミーティング(スタディツアーのまとめ) → 自由行動(ボカラ観光)	○	ゲストハウス
9月5日	金	Pokhara-Kathmandu	移動(バス) → 自由行動(カトマンドゥ観光)	○	ホテル
9月6日	土	Kathmandu-Bangkok	移動(フライト)	○ 機 機	機中泊
9月7日	日	Narita	成田空港着(朝)、解散		

訪問先のサリジャ村ならびにナンギ村の皆様はあたたかく私たちをむかえ 入れてくださり、大変お世話になった。ここに明記して、これらの方々にかつ 感謝の意を表する。

## 2. 調査項目 -問題提起-

事前オリエンテーションならびにツアー中のミーティングにて、参加者から、調査項目や疑問点・質問事項を出してもらい、ヒマラヤ保全協会が実践している「参画型アプローチ」の中の「調査項目ネット」とよばれる図解法をつかって整理した。以下にその結果を列挙する。

### (1) ネパール人は日本人をどうおもっているか

- ネパールの人々は日本・日本人にどういう印象を持っているのかを知りたい。

### (2) エベレストが見たい

- エベレストが見たい。

### (3) 村人の生活はどのようなものか

- 現地の村人の生活スタイルを知りたい。
- 村の歴史、生活、今と比べて。
- 村での暮らしで気に入っているところを知りたい。
- 現在の暮らしの中で不便だと思うことがあれば知りたい。
- 村人の家、特に台所の使い方。
- 生活用水の得方、使い方。
- 食糧・生活必需品の自給の頻度。現金支出の必要性。
- 道路や人々の往来の状況、行き先、所要時間、頻度、雨期の状況。
- 村人は必要な食糧や現金をどのように得ているのか。
- 出稼ぎの状況。どこへどのくらいの期間、誰が。本人、家族の悩み。
- お役所に対する期待と不満。中央の政権交代の影響。

### (4) 環境保全と村の未来はどうかかわっているか

- 山間地の森林植生、土壌、保全の状況
- 木の種類と用途 自宅周辺の植え方
- 植林に対する村人の意識。最初はどう思ったか、今はどう思っているか。
- 環境保全と開発は両立しているか。
- 環境保全の支援がどのくらい役立っているのか。開発の実態を見たい。
- 私達（外部者）が現地でどのように環境保全に関わるべきかを知りたい
- 現地住民が、現在の環境、開発についてどう思っているかを知りたい。
- 住民に今後、自分達や村がどうなっていきたいかを聞いてみたい。

### (5) ヒマラヤ保全協会のプロジェクトを見る

- プロジェクトを行なう村を決める基準・調査の仕方を知りたい。
- 支援プロジェクトを企画した側と現地住民のギャップがないか、あるいはギャップをどのように埋めていくかを知りたい。
- ヒマラヤ保全協会と村人間のコミュニケーションのやり方。

- 村に外国人がプロジェクトを見学しにくることについて正直どう思うか知りたい。

#### (6) 村の医療体制はどうか

- 村での医療体制を知りたい。エイズなど。
- エイズに関連して、コンドームなどは手に入るのか。

#### (7) 村人と交流したい

- 現地の子どもたちとサッカーをしたい。
- 村人、子ども達の将来の夢。
- 教育体制について、学校に通えているのか。
- 若者の日々の過ごし方 (仕事か、勉強)。
- 日本の子どもに伝えたいことがあれば知りたい。
- 村の人々のインド顔絵を描きたい。

### 3. フィールドワークの記録 -データベース-

現地では、参加者各自が見たり聞いたりしたことを「データカード」に記録した。それらを、まとめのミーティングで「検索ネット」という図解法をもちいて整理した。前回のスタディツアーにひきつづき、「フィールドワーク」→「データカード」を実践したため、事業地に関する重要かつ貴重な情報が多数集積された。これらは、現地事業を今後すすめていく上で大変役立つものである。以下にその内容を掲載する。

#### (1) 森林保全

##### 木の伐採の止まらない一つの要因。(Sa-10)

電気が通っているのに、調理には蒔きを使用している。

そのため、木の伐採が止まらない。

灯、調理の火、暖房といった火を使うところで蒔使用をなくしていかなければならないのではないか。

##### 森林保全と開発の隣合わせに。(O-9)

ナンギ村からベニへ向かう道中、山を切り拓いて道路開発をする人々を見た。元々あった登山道をなくしたり、つぶしたりしながらひたすら道路開拓を行ったようだ。しかし植林された森が倒されている。他方、道ができれば、村から村への物資や食料が手に入りやすいという利便さは得られる。この両極をどう考えていくかが、これからの開発の在り方だ。

(date:2008/09/03 place:ナンギ～ベニ)

##### サリジャ村の植樹種は、ナンギ村に比べ少ない。(Si-3)

サリジャ村では21種の苗木を育成・植樹しているが、まだ木材用、薪炭用、飼料用、薬用、繊維用にとどまっており、ナンギ村のように果樹や花卉に着手できていない。

クリなどのナッツ類や祭事用の花など、開拓の余地があるかもしれない(私見)。

(Date: 08/08/31 および 08/09/02 Source: サカマニ・コルジャおよびモッティ氏 Place: サリジャ村およびナンギ村 Recorder: S.M.)

##### サリジャ村の森林保全。(O-3)

村人は木を欲しているのか。ホームステイ先の嫁プワンビクラに「今日は植樹をする」と言ったところ、「タンキュー」とお礼を言われた。「木は必要だと思うか」の質問には「イエス」と答え、「cutting, dry, make a fire」と木炭や薪のことを指しているようだ。英語でうまく伝わったか定かではないが、どうやら木のニーズはあるらしい。

実際に苗畑も21種類の植樹を育てており、土にも化学肥料は使用していないらしい。牛のミルクや糞、肉をコンポストとして使っていて、無駄なく持続可能な森林保全を進めているようだ。ただ、実際の植樹場には様々な木が植えられ、自然生物学的に、また景観的にどうかという疑問は残る。しかし、村人自身が行っていることに意味があるのだろうし、これからハンドオーバーのためにいかに運営していくかが課題だろう。

(date:2008/08/31 place:サリジャ村苗畑～植樹場 source:プワンビクラ、チトラさん)

##### サリジャ村近くのお店のおじさんの話。(O-4)

ホームステイ先の子供たちと10分ほど歩いた商店に行った。そこの店長のシビさん(60)は少し英語が話

せる。出身はベニのようだが、英語を学校で習ったわけではないらしい。ある程度外国人と接触があったのかもしれない。

英語でうまく伝わったかわからないが、「木が欲しいか」と問うたところ、「イエス」と答えた。主に木炭用としての木は、やはり必要とされているのかもしれない。ただ、IHCのツアーで来たと伝えると、「IHCは知らない」と返事が返ってきた。森林保全を行っていることは村人に知られていないのだろうか。

(date:2008/09/01 place:サリジャ村から歩いて10分程の商店 source:シビさん(店長))

## (2) 生活環境の変化と開発

### 6ヶ月間での村の変化。(I-5)

この6ヶ月間で、村には大きな変化があった。村へつながる林道。センターハウスのプロパンガス。子機の付いた電話。全てが確実に近代化していた。しかしそれは同時に、村内の格差を広げてしまうものだと思えた。林道に関してはもっと技術力が必要であり、開通ありきの工事を行ったようにも思えた。

(date : 31,08,2008 place : サリジャ村 Recorder : I. K.)

### 村人は何を欲しているのか。(0-5)

村人とのミーティング中、センターハウスの奥さん、子供とつたないネパール語と英語で会話。

私「今、何が欲しいか？」 奥さん「水が欲しい。」

私「水や木は少ないか？」 奥さん「少ない。」

私「今、何をしたいか？」 奥さん「水を汲みに行きたい。」

→木もそうだが、水の必要性も感じた。生活用水として、女性は特にそう思っているのかもしれない。

私「今、何が欲しいか？」 ピリング(子)「(旅の指差し会話帳で)携帯電話、CDラジカセ。」

私「パソコンは？」 ピリング「いない。」

→村にインターネットが入っていないので、パソコンを必要とする感覚はないのだろう。近い将来、そうした価値観は現れてくるかもしれない。

(date:2008/09/01 place:サリジャ村センターハウス source:センターハウスの奥さんと子供)

## (3) 村人の実態

### サリジャ村最後の夜。(0-6)

サリジャ村での生活最後の夜、星を見ながら嫁プワンビクラとの会話。

私「もし日本に来られたら、私の家に遊びに来てください。」

プワンビクラ「ノー。」

→そんなチャンスはないという否定。本当に一生を村、あるいはネパール国内でしか考えられないのかもしれない。しかし、夫は海外でも働いている。グローバルな感覚はあるのだろうが、自分自身が出国する困難さゆえの否定か。

私「今、幸せですか？」

プワンビクラ「時々幸せ、時々幸せじゃない。」

→私のホームステイ先は、そこまで貧しさを感じなかったため、第三者からの視点では苦しさの問題はないのでは、と思っていた。しかし、国籍は異なるだろうが、同じ人間であり、日々の辛さというものはある。ここ



の村人は幸せかもしれない…と考えていた外部者の視点を改めて考え直させられた。

(date:2008/09/01 place:ホームステイ先 source:プワンビクラ)

#### 指導熱心な母親。(I-4)

ホストファミリーの末娘さんには、6歳の子どもがいる。印象的だったのは、時間があればいつも子どもに勉強させていたことだ。学校に行く前、夕方、彼女はいつも子どもに読み書きをさせていた。彼女は23歳だが英語が話せない。彼女自身が、教育の重要性を感じているように思えた。

(date : 31,08,2008 place : サリジャ村 Recorder : I.K.)

#### 16歳の女の子の1日の生活。(Sa-6)

太陽とともに5時に起き、掃き掃除をして火をたく。その後、すぐ牛の世話をする。  
8時ごろにジャガイモなどの軽い食事をして、鎌をもって農作業へ。  
3時ごろ軽い昼食を食べ、またの農作業へ。牛のための草刈にも行く。  
5時くらいから7時くらいまで友人とバレーをする。家事をする日は遊ばない。  
7時くらいから、母親を手伝いながら夕飯を食べる。食器は翌朝洗うので、ためておく。  
8時半頃、ベッドに入る。その間、7歳の弟の世話や家事手伝いを欠かさない。  
彼女は、16歳までのスクールの後、お金がないため進学できず、家事手伝いをしている。将来は、よいお家に嫁がせたいと母は言っていた。

(8月31日 Salija村)

#### サリジャ村の出発の朝。(0-7)

朝、嫁プワンビクラが起床すると、すぐに薪で火をおこし、簡単な食事の用意をし始めた。毎日のことだが、非常に働き者である。花を採ってきたかと思うと、それで首飾りを作ってくれた。たったの3日間、それだけしか過ごしていなかったのに、多くのもてなしをしてくれ、別れを惜しんでくれる村人の心の温かさを強く感じた。

(date:2008/09/02 place:ホームステイ先)

#### 自然の中での生活。(Sa-5)

朝は日の出とともに起き、夜はろうそくや太陽光のライトのもので過ごす。  
トイレはあるものの、家の前のとうもろこし畑で便をする。  
残飯は家畜であるヤギやニワトリが食す。  
ごみ(紙類)は調理の際の、種火として使われる。

(8月31日 Salija村)

### (4) 村民世帯の現状

#### ホームステイ・ファミリー。(0-1)

祖父：カー バハドゥール プルジャ(60)

祖母：ギャン マヤ プルジャ(50)

長男-嫁：よくわからず。近くの家に別居。

次男：インドで兵士。-嫁：スンマヤ(25) 長女：イサ(6) 長男：サーチン(1)

三男：カトマンズで出稼ぎ。海外でも働く。一嫁：プワンビクラ (25) 長女：リーナ (5)

四男：ラーズマン 同居。一嫁：シッタ (20)

おばあちゃんが元気な大家族。私は三男嫁のプワンビクラの家 (部屋) で生活した。ほとんど何もないと想像していたが、電気、ラジオ、かまど、ベッド、二階がある。子供はシャイなようで、初めはなついてくれなかったが、家にあるホワイトボードで子供たちの絵を描くと喜んで笑ってくれた。プワンビクラは何とか英語が通じ、コミュニケーションが可能だ。旅の指差し会話帳を出すと、子供たちは興味津々で読み始めた。どうやら primary school に通っているらしい。リーナは英語のコミュニケーションのクラスが好きだという。小さな村ではあるが、幼い子供も学校へ通い、英語を学んでいる。ネパール語も教えてもらっているようで、字も書ける。あまり不自由さは感じていないような気がする。

夕食も水牛の肉付きのダルバートを食べた。案外裕福な家庭かもしれない。

(date:2008/08/30 place:ホームステイ先の家 (サリジャ村))

### ホストファミリーの事情。(Sa-1)

父親は4年前にドバイで亡くし、今は母、父方の祖父、17歳の娘、7歳の息子の4人家族で住む。

1年間だけ、ボカラからいところがサリジャの学校に通っているため居候している。

祖父は隣村の農地で働き、母、娘とも自分たちの畑で農作業を行っている。

現金収入は祖父からのものと、単発的なものしかないと思われる。

ボカラ出身の母は英語が聞け、話せるが書けない、読めない。

一方、サリジャで生まれ育った娘は聞き取り、会話はできないが、読み書きだけできる。

(8月30日 Saliija 村)

### 家族の分散居住が進展しており、男子及び若手労働力が減少している。(Si-2)

ホスト・ファミリー (ソム・ボハドゥール・ブン家) の家族構成は次のとおりだが、現金収入を得るための就業や教育で自家を離れる構成員が多い。

祖母：マヤ・ブン (?) …サリジャ村に在住

父：ソム・ボハドゥール・ブン (50) …インド・オリッサ州に出稼ぎ (20年間)

母：インドラクマリ・ブン (40) …サリジャ村に在住

長女：プアトマ・ブン (?) …クスマ村にて教師

次女：シータ・ブン (16) …サリジャ村に在住、10年生

三女：ショーバ・ブン (?) …ナンギ村にて寄宿舎から学校通い、11年生

長男：コモル・ブン (15) …サリジャ村に在住、9年生

カッコ内は確認できた年齢。次女と三女の順番は語られたとおりに記載したが、逆か？

なお、一家は一年に一度、ダサイン祭の折に帰郷・再会するとのこと。

(Date:08/09/01 Source:インドラクマリ・ブンおよびコモル・ブン Place:サリジャ村 Recorder:S.M.)

### 一家の大黒柱は、日本での労働を望んでいた。(I-2)

前回も世話になった、キルトバドルという青年は、ホストハウスの近くに住んでいる。前回は知らなかったが、父親を1年前に亡くしたそうだ。妹がまだ学校へ行っているため、職はないが村に残っているようだ。彼はしきりに、どうすれば日本へ行き働けるのかを知りたがっていた。今は貧乏なので、日本へ行き大金をつかみたいと言っていた。日本は、たくさんの職があり、大金をつかめる国という印象を持っているようだ。

(date:30,08,2008 source:キルトバドル place:サリジャ村 Recorder:I.K.)

### ホストファミリーの子どもたちは、海外で就労。(I-3)

前は聞かなかったが、ホストファーザーには5人の子どもがいるそうだ。3人の息子はサウジアラビアなどで働き、2人の娘はすでに結婚したそうだ。しかし、ひとりの娘の主人は、ドバイで亡くなったそうで、ホストファーザーたちと一緒に暮らしていた。村に仕事はなく、他国へ働きに行くのは仕方がないそうだ。

(date : 30, 08, 2008 source :モホン(近所の青年) place : サリジャ村 Recorder : I.K.)

## (5) 現金収入向上の必要性と取り組みの現状

### 織物の質の向上。(I-6)

前回よりも織物の質ははるかに向上していた。デザインもとても工夫されていた。残念ながら改善すべき点は多々あるが、そのコメントを真摯に受け止める彼女らに好感を持てた。

(date : 01, 09, 2008 place : サリジャ村 Recorder : I.K.)

### ナンギ村の新製品は、他の村の製品に比べほぼ遜色はないが、サリジャ村の織物製品は改善の余地がある。(Si-5)

ナンギ村の紙製品は、ポカラの土産店で販売されているものを比べても、紙質や製本技術においてほぼ遜色ない。ただし、品質の安定性や、柄・装飾模様などにおいて改善の余地はまだある。

サリジャ村の織物製品は、WSDP のものと比べ、まだ基本的な縫製においてもおとり、染色・装飾・デザインにおいても改善すべき点が多い

(Date : 08/09/01、08/09/02、08/09/04 Place : サリジャ村、ナンギ村、ポカラ Recorder : S.M.)

### ナンギ村にて(養殖場)。(0-8)

養殖場、ウサギ飼育場は村人のアイデアで、村人のボランティアで建設。しかし、魚を食べる文化は4年ほど前までなかった。

→ポカラやベニで売るため、つまり現金を得るためのツールである。こうした村の発展が、村人自ら出てきたアイデアによって行われることが理想だ。

(date:2008/09/02 place:ナンギ村 source:モッティーさん)

### ホストファミリーは、現金依存度が高い。(Si-1)

ホスト・ファミリーであるソム・ボハドゥール・ブン家の支出・収入において現金の占める割合が高いものと思われる。

- ・収入：家長の出稼ぎ（インド・オリッサ州）をはじめ、ロキシー作りなどの現金収入に頼っているものと思われる（教師の長女から仕送りあるかは未確認）。

畑の規模はトウモロコシ・シコクビエ・野菜合わせて 1ha 程度であり、現在の居住家族 4 名の一年分の食料自給にも不足するのでは。

- ・支出：滞在中の食事（ダルバート、ジャガイモ、トウモロコシ、チャ、ビスケット）や生活用品は現金で購入しなければならないものが多い（ジャガイモ、トウモロコシのみ自給）。教育費も大きいものと思われる。

(Date : 08/08/30-08/09/01 Place : サリジャ村 Recorder : S.M.)

## (6) 教育

### サリジャ村の Primary school の実態。(0-2)

私が主に寝泊まりする家の嫁プワンビクラは、学校の教師らしい。英語とネパール語を教えている。だから子供も字が書けるのだろう。

学校は Primary で家から 15 分ほど歩く。教師・スタッフが 5 人おり、子供 75 人が通う。英語、ネパール語、数学、イスラムの教科があり、子供たちの学費は無料。校長は 6200Rs/月、教師は 3000Rs/月を政府からもらっているという。

学校は二階建てで、オフィスに行くと、校長が笑顔で対応してくれた。簡単な英語は通じる。子供たちは私が相当珍しいのか、すぐに近くへ寄ってきた。しばらくすると、まだ教師のいない教室から子供たちの歌声が聞こえてきた。貧しいと言いつつも、サリジャ村で幸せに暮らしている様子ぶりがうかがえる。物は不足しつつも、心はそうではないのかもしれない。

ホームステイ先の子供リーナは 6 歳で学校のクラス 2 にいるが、クラス 5 を卒業すると high school に行くらしい。

(date:2008/08/31 place:ホームステイ先の家～primary school への道 resource:プワンビクラ)

## (7) 医療保健・衛生

### 村での保健体制（ヘルス・ポスト）。(Sa-7)

薬、治療すべて無料。

避妊用品や知識の伝達など、ファミリープランニングに重点が置かれていた。薬品や道具はある程度そろっているが、使用期限に配慮がなされていないところもあった。手洗い用のバケツはあるものの、石鹸がないなど、不完全な部分も見受けられる。

(9月1日 Salija 村 ヘルス・ポストのスタッフから)

### サリジャ村の衛生状態。(Sa-2)

上水がうまくなされていないため、水道水から白い水がでる。

歯磨きは朝ごはんの後、1回。そのため 7 歳の息子は虫歯だらけであった。治療を受けることもできないで泣いていた。

赤ん坊は下着を着けていない。

(8月30日 Salija 村)

### サリジャ村のトイレ事情。(Sa-8)

外部のサポートが入ったというトイレは、便器が置かれており、ブラシが備え付けられているところが多い。ほかの途上国と比較して、立派なものだ。

だが、下水処理はきちんとなく、徹底的な教育も受けていないため、垂れ流しのところもある。外観だけをサポートするのではなく、本質的な部分までサポートしてこそ、意義あるサポートになるのではないか。(主観)

(9月1日 Salija 村)

#### 虫に対する意識。(Sa-4)

干してある服に虫が飛びついていて、食べ物にもたかっていた。が、村人はあまり気にせず食べていた。服や食事からも感染する可能性がある。

(8月31日 Saliya 村)

#### サリジャ村の炊事環境は劣悪。(Si-4)

ホスト・ファミリー(ソム・ボハドゥール・ブン家)の台所での炊事には、次のような問題点がある。三点支持金具のみを用い、カマドがなく、熱効率が悪い。煙が逃げず室内にたまるため、目や喉に悪影響が出る。

(Date: 08/09/01 Source: インドラクマリ・ブン Place: サリジャ村 Recorder: S.M.)

#### 食事の偏り。(Sa-3)

食事内容は、ジャガイモ、ライス、パン、クッキー、ヌードルといったもので、炭水化物に偏りすぎている。極端に緑黄色野菜が少ない。オイル、塩分、糖分過多である。(気候的に適しているのか?)

(8月31日 Saliya 村)

### (8) 外部者としての配慮

#### 日本のお土産を渡す際に注意すべきこと。(I-1)

サリジャ村での最初の夜、夕食の際に日本からのお土産を渡したが、9歳のカティカが乾燥剤を食べようとしてしまった。袋の中に入っていたので食べられると思ったらしい。他国の人日本語を読めないため、よく薬をあげてはいけないと言われるが、お土産を渡す際の乾燥剤への配慮も必要だと感じた。

(date: 30,08,2008 place: サリジャ村 Recorder: I.K.)

## 4. 参加者の感想

### 村の発展

I. K.



新たな村の取組み（写真は紙漉の道具）

六ヶ月ぶりにサリジャ村を訪れて、多くの変化に驚かされた。前回は乾季であり、雨季であった今回とは当然ロケーションが違うわけだが、農業風景や田園の色彩以外に、村の環境は変化を見せており、村の人々が求めているものや、村の人々の向上心を伺えた。

サリジャに近づくとつれ、前回とは違う道を通っていることに気がついた。前回通った道は数メートル下に見え、より幅の広い道を私たちは歩いていた。ベニから続いていた林道はかなり近くまで延長させていた。後から知るのだが、逆ルートは既に開通していて、

一度ジープがサリジャまで来たそうである。全てわずか六ヶ月以内の出来事である。

村では紙作りも始まっていた。前回訪れた際には、建物だけが整い、実際の作業はまだこれからといった感じだったが、今回行くと紙作りを行う女性メンバーは決まっており、彼女らは技術指導も受け、雨季前に作った大量の紙も既にあつた。驚くべきスピードである。しかも、紙自体もなかなかの出来栄であった。

織物工場にも訪れたが、その隣で売っている商品量の増加にも驚いてしまった。二月に行った時には、隣の商店で数点置いている程度であったが、今回行くと隣接する建物の中に、数台のミシン、そして壁にはたくさんさんのバッグやジャケット、帽子や小物が。商品量もそうだが、アイテムがかなり増えていた。麓の村に売りに行っているとのことであるが、生産スピードが向上していることは、見ているだけで感じた。残念ながら、縫製には難が多く、糸の末端処理などをしっかり行い、錆や汚れに注意を払って制作していかないと、日本をはじめ先進国で売れるレベルにはならない。その中でもショールなどは質感もよく、十分日本でも売れるものであつた。

紙も織物もそうであるが、さまざまなインフラ整備として、最初に書いた林道は必要なのであろう。物資の輸送にも優位性はあるし、麓のものも安易に運べる。と同時に、新しい文化も運ばれてくるであろう。医療面を考えると、林道はとても有益に思える。ただそれは、村側に車があつてのこと。林道が開通すれば、難病人がいてもこれまでよりかは搬送が早まるであろうが、真のスピードを考えたら村への医療の普及であらう。

「命」を考えた時に、村につながる林道整備は賛成である。そのためには、林道整備の技術も必要であり、現在の整備により起こしている植林の森の破壊や崖崩れなど、弊害を起こさない努力も必要である。道は村の発展に不可欠なもの。しかし、そのために犠牲になるものを発生させてほしくない。また、入ってくる文化も受け止め、今でもある村内での格差がより大きくなっていく可能性があることも、受け止めていかなければならない要因であるように考える。サリジャ村のこの先の変化がどうなっていくのか、とても興味深く思っている。

## ネパールの山村が意味するもの

S. M.

今回、サリジャ、ナンギ、そして（ツアー終了後に個人的に向かった）ディリチョールと、3つのネパール山中の村を訪れるにつけ、「途上国」と言い、その「貧困」と言い、決して己と縁遠いものではなく、どこかでつながっているものなのだ、という感をさらに深くすることになった。

むろん、ネパールと日本の外見上の類似が、この感覚にいくばくか寄与していることは否定しない。ネパールの山間地の風景は、地形も植生も日本のそれに酷似しているし、マガルやチベット人のひとびとの相貌も、我々となにがしか血脈上の祖を共にしているに違いないと思わせる。言葉や住居、生活習慣の違いに目をつむれば、自分はいま日本にいるのではないかと想像することすら、存外に容易だった。

またひるがえって、ネパールには独自の歴史と文化と事情があることも、よく承知しているつもりだ。陸封の山岳国として、数多くの集団が流動割拠してきた歴史を持ち、民族・言語・宗教・カーストが複雑に入り組み折り重なった曼陀羅模様を描いている。そして現在では、北に中国、南にインドという大国に挟まれつつ、その中で望ましい政治的・経済的な立ち位置を得ようとして苦慮せざるを得ない。国内の政治や行政の混乱と腐敗も、マオイストを中心とした新政権によって解決されるのかどうか、先行きは全くもって不透明である。そも、紛争中の人権侵害の真相究明と和解、PLAの国軍への編入やマオイスト若年層の社会への再統合といった問題も山積しており、長年の紛争がもたらした社会の亀裂すら、まだ生々しく傷口を開けたままで、癒えるには相当の時間を必要としよう。そしてそんな中で、外国からの援助と観光客に頼る首都カトマンズのひとびとは目先の銭金を追うことに狂奔し、山間地の農村に目を向ける人は少ない。

そして確かに、村むらにおけるひとびとの人生と暮らしと想いは、彼らのものであって、己のものではない。せいぜい数日起居をともにした過客にすぎない己、日本に戻れば都市の便利さの中にどっぷり浸かるだけの己が、彼らが抱えるさまざまな悩みや問題を共有できるなどと簡単に言えようはずもあるまい。あれほどに親愛さを示してくれた彼らとの間に育むことのできた交情はそれはそれとして、彼らのなにごとかを安易に己に引き寄せて考えることにも、己のなにごとかを軽々に彼らに仮託しようとするということにも、その結果として至って容易に幻想と欺瞞が生じるであろうことを考えると、きわめて慎重にならざるをえない。

だがそれでも、これらのことどもを足し引きした上でもなお、ネパールの山村で起きていることは、決して他人事ではない。それは間違いなく、我々自身がたどってきた途や、今まさに経験しつつある事態と通底している。だから、彼らと時間軸を共にする存在として、彼らとともにこの世界に在るものとして、思うの



サリシャ村でステイしたフン家の人々。父親は出稼き中、娘さんも二人は他村暮らし。たたこの後、親戚の若い連中か外国人見たさに大挙して押し寄せてきました。

だ。彼らの暮らしが健やかに成り立つことなくして、我々の暮らしもまた、遠からず足許を掘り崩されて空しくなるだろう、と。それも、倫理的・形而上的な観念論ではなく、すぐれて切実な現実感覚として。

ひとは、幸せになりたいと願う。豊かになりたい、楽になりたいと思う。ごくあたりまえのことである。高い収入を得て、よい食事をし、きれいな水を飲み、上等な衣服を身につけ、病気や怪我の時はすぐに医者にかかったり薬を服んだりし、子どもには親よりいい生活をしてもらい、老後は安泰に暮らしたい。そのために、現金を得ようとして壮年の男を出稼ぎに送り出す。子どもにはできる限り高い教育を受けさせ、町でよい職を見つけさせる。外部から何か援助を得られそうであれば、とりあえずは手を挙げてみる。

我々自身が、そうしてきた。そうして豊かになり、経済成長の成功例としてもてはやされ、その代わりに、農村から人がいなくなり、農業やさまざまな生業が衰退し、山林や田畑は荒廃し、その結果として、社会を存立させるための生物的な基盤がきわめて脆弱な現状を招来することになった。

ネパールでも、全く同じことが起きている。男は出稼ぎに出払い、教育を受けた子どもたちは村の生活や農業には戻らず、年寄りと女が辛うじて村の暮らしを支え、荒れゆく森林がネパールだけでなく南アジア全体の土と水を保つ力を喪っていき。これはネパールだけの問題ではない。アジアとアフリカとアメリカとを問わず、ほぼ全ての大陸の途上国で同様の現象が見られる。農業経済学においては、農村からの労働力と所得の移転は、定式化された現象として扱われている観すらある。

それにもはや、外部からやって来る「開発」と、そこにある「暮らし」や「環境」とを対置して、二者択一できるという状況ではない。「開発」（もっと正確に言えば、現代経済そのもの）はすでに、ひとびとの暮らしや価値観に内在していて、切り離しようがない。都合のよいところだけをいいとこ取りでつまみ食いするわけには、いかないのだ。

そして我々自身、それ以外の途を知らない。成長と豊かさを目指した果てに矛盾とリスクが膨れあがりつつあることは分かっているながらも、それ以外の途を選択するほどの確信も勇気も智慧も、集団として持つことができない。いくつもの（失われたか失われつつある）先住民社会、（現在進行形の）ブータンや個人的な試みについて語りはしても、それらが大多数のひとびとにとって現実解と見なされ、実践に移されることはない。そうするには、これまでに築き上げてきたものが、あまりにも当たり前すぎ、魅力的にすぎるのだ。我々にとっても、途上国のひとびとにとっても。

だから、村のひとびとに向かって、自然環境の大切さ、伝統的な暮らしの価値や人心の暖かさを語る我々の言葉は、ときにひどく虚ろに響く。それらを置き捨てて獲得した豊かな果実を食い散らかしている世代に属する者が何を語ったとて、村のひとびとの胸には何ら重みをもって落ちるまい。ヒマラヤ保全協会が長年進めてきた森林保全の努力ですら、そのことで日々の暮らし向きが実際に良くなったと、村のひとびと自身が実感しないかぎり、多くはなし得ないのだから。

それでも、ただ今現在は我々も彼らも頼りになる答えを持ち合わせていないにしても、諦めるわけにはいかない。ネパールがしょせんは我々と同様の途をたどるしかないのなら、そこでは、我々と同じような幸せと不仕合わせが、おそらくはもっと偏った極端な形で、再び現出するにすぎないのだ。それはいかにも、人間の心性と能力の限界を目の当たりにするようで、心冷える情景ではあるまいか。そして、彼らにも他の途を見いだせないのであれば、我々の先行きにとっても希望がまた一つ失われることを意味する。単に他山の石というだけではない。ネパールが、我々自身が乗っかっている砂上の楼閣の一部となるならば、ネパール



が崩れるとき、我々もまたともに沈むのだから。

だから、つくづく身勝手を言っていることは承知の上で、思うのだ。我々が悩むのと同じように、ネパールのひとびとにも、よくよく考えてほしい。自分たちの進む先に、何があるのか。自分たちが何を得て、何を失おうとしているのか。そのためには、彼らの村をたまさか訪れる「豊かな日本人」だけでなく、日本で彼らと同じような状況にある山間地のひとびとが、何を経験し、何を思い、どのように生きているかについても、ぜひ知ってほしい。ネパールの他の村のひとびとも、よく語り合ってほしい。そしてなにごとにつけても、ゆっくりと一步一步、自分の目で見て確かめ考えながら、進んでいってほしい。他のなにごとでもなく彼ら自身の幸せのために、鳩のような素直さだけでなく、蛇の ような賢さを身に付けてほしい。

大きなお世話だろうか。たぶんそうだろう。そうであることを、心から祈っている。彼らのためにも、我々のためにも、そして彼らとの今後の長い付き合いのためにも。

## チャウチャウ

S. E.



チャウチャウを作るマザーと 7 歳の息子。台所はマザーの聖地

私のサリジャ村での生活は、なんとも心地よいものであった。

夜、遠くの暗闇の中のホタルの緑の光や満天の星空を眺めながら楽しむホストファミリーとの会話。

ヒルにかまれながらも、一日の汗を洗い流してくれる暗闇の中の冷たい沢での水浴び。

じゃがいもに囲まれながら、物音一つ、光一つない静かな屋根 部屋で深い眠りに落ちる夜。

そんな心地よい生活に影が出始めたのが、ホームステイ 3 日目の夜あたりだった。食べることが大好きの私が、どうも食事をエンジョイできないでいた。

それはなぜかという、チャウチャウ（ネパール版インスタントラーメン）が、朝、昼、晩、朝、昼・・と立て続けに続いてきたからだ。いくら美味しいチャウチャウでも、こうも続くと、体がイエローカードを出し始めていた。でも、お腹はすいている。食べるしかない。イエローカードを握り締め、チャウチャウを食す私。お皿がからっぽになると、さらにチャウチャウを足そうとする、娘さん。「プギョ、プギョ」たまに「ポニョ、ポニョ」と間違えながらも、御代わりを遠慮する私。だんだんチャウチャウが憎らしくなってきた。このちぢれ野郎！

チャウチャウに八つ当たりしていた私は、要因をよくよく考えてみた。すると、チャウチャウが毎回登場

しなければならないのは、私が仕向けていたからであることがわかった。

なぜかという、私は、マザーが出すものを、何でも「ミトチャ（うまい）」と義理人情を持ちながら頂いていたからだ。特にチャウチャウの場合は、最初の頃、あまりにも腹ペコで、美味しくって、「ミトチャ」を連呼していた。これが、私の大きな過ちであった。わたしの繰り返されるチャウチャウへのミトチャコールを聞いたマザーは、私はチャウチャウが大好きだと思いこんだのであり、さらに通常の食事より、日本人の口に合うチャウチャウの方が私にいいと思ったのであろう。マザーは好意で、なけなしのお金を使って、私に毎食チャウチャウを出してくれたのだ。本当にありがとう。

ネパールは、自分の意見、気持ちをしっかり伝えなければならない国だ。義理なんてない。すべてそのまま伝わってしまう。NO としっかり伝えなければならないのだ。なのに私は、マザーに悪いと思い、チャウチャウが続いても、「チャウチャウはもういい。」と一言も言えないでいた。これは、私にとっても、マザーにとってもよくないことであった。お互いいい気持ちになれない。

このチャウチャウだけではない。ツアーの最中でも、私は義理を感じて、自分の気持ちを正直に伝えられなかった。これには、仲間に非常にいやな思いをさせた。誠に申し訳ない。この場をかりて、謝罪したい。

これらのことから、私は、自分の気持ちを素直に伝える大切さを痛感した。黙っていても伝わらない。お互いよい関係を築けない。つらくなるのは自分、楽しめない。そして、みんなも楽しめないという連鎖が起こってしまった。他人の気持ちを考えたふりして、結局、自分のことしか考えていないことなのだ。

この教訓は、うまく自分の気持ちを伝えられない私にとって、これからの大きな課題となった。このことを、身をもって感じさせてくれた、チャウチャウを作ってくれたマザーやツアーの仲間に心よりお礼を伝えたい。

## 外部者の視点

O. A.

このスタディーツアーで私が考えさせられたこと、それは「外部者の視点の在り方」である。今回は私自身、2つの外部者的側面を意識していた。第1にヒマラヤ保全協会の調査者のひとり、第2に観光者のひとりとして参加させて頂いたことだ。特に、その外部者としての視点の重要性を感じたのは、サリジャ村を訪れた時のことである。

まず、村人の生活に入り込む調査者兼観光者という意味での外部者だ。サリジャ村では、実際にホームステイをしながら、村人と一緒に生活した。サリジャ村の人々にとって、突然訪れた珍しい日本人は、正に外部者であっただろう。家族と同じ空間で生活するため、家に一歩足を踏み入れた時からバックパックを置く行動一つでさえ、見られている感覚があった。子供は私が次に荷物から何を出すのか、興味津々だったのだと思う。しかし、子供の母親やお



私のホストファミリー。別れを悲しみ、子供は不機嫌になってしまった。

ばあさんは、私が以前から一緒に暮らしていたかのように、ネパール語で会話しながらトウモロコシの皮をむき続けていた。一見、気にされていないようにも捉えられるが、私にとってはステイ初日から家族と同じ生活リズムに取り入れてもらったような、一種の嬉しさを感じた瞬間でもあった。ホームステイ先ではお嫁さんと英語でコミュニケーションをとる以外、ほとんど会話にならない生活。しかし、そんな中で 3 日間を過ごした私に対し、最終日におばあさんがネパール語で「次に来る時は、あなたが結婚して、その子供を私がだっこするわ」と言ってくれたことや、別れを惜しんで、不機嫌になってしまった子供のことを忘れることはできない。調査者として、村人とある程度の距離感は大事だと思っていたが、私自身、村人への思い入れは強い。村人と共に暮らして、心を通わせること、これこそ村人が何を望んでいるのかを汲み取ることにつながるのだろう。

もう一点は、森林保全開発や村落開発プロジェクトなど、IHC が関わる開発の実態を視察するという調査者としての外部者である。この立場でこそ、村の変化に良い意味でも悪い意味でも関わっているということ意識しなければならないだろう。ただ単に、村全体が発展してほしいという思いだけでは務まらない。開発を進めていく外部者として、村内の格差を生む可能性もあるということ意識した、客観的視点の重要性を学ぶことができた。同時に、社会開発の理念で謳われているような、外部者として現地住民の自立を促す難しさも感じた。

私は今まで NGO や NPO の活動に参加したことがなかったため、開発のプロジェクト等が一体どのように行われているのか、またその裨益者である現地住民がどのように開発を捉えているのかということに興味があった。今回のスタディーツアーでは、森林保全プロジェクトの視察や村人との交流を経て、一部ではあるが、現在の開発の実態を垣間見ることができたような気がする。もちろん、村人の言動も本当のところは違うのかもしれないし、私たちが滞在した期間は普段の生活とは異なっていたかもしれない。しかし、今回のツアーを通して、少なくとも、村人の外部者に対する寛容な人間性を感じることができたし、それが文化として存在することを実感することができた。開発を進める際に、外部者がその地域の土着文化を理解することが重要だといわれるように、今回の自分自身の学びが少しでも開発を考えていく手助けになればと思う。



## 5. 写真



食器洗いをする娘のグマ。洗剤を含んだ汚水は畑に直接流れていた。



夕食後、家族で寄り添って団欒する夜。小さなライトのしたに集まる家族。一つのライトが家族をつないでいるところに日本にない家族の絆を感じた。



サリジャ村の小学校。訪問すると、珍しがってすぐ子供たちに囲まれてしまった。



ナンギ村からベニへ向かう途中の集落。標高が高い所でも子供たちは元気だ。



子どもに勉強を教える母。





放棄された畑の土留め石垣が崩落してしましました。山村の暮らしは、森林や段々畑や道を人間が日々維持しなければ成り立ちません。



山村の遠景。何百年もの営みか築き上げた景色です。ただただ、ネハールの山村の人々に頭を下げずにいられません。



サリジャ村の小学生たちとともに。

**第 21 回スタディツアー報告書**

編集・発行 特定非営利活動法人ヒマラヤ保全協会

発行日 2008 年 10 月 26 日